

〔編集後記〕

コロナ禍は社会のスタンダードを大きく変化させましたが、学术界も例外ではありません。その1つが医学研究論文の公表様式の変化です。査読前論文のオープンアクセスシステム、「プレプリントサーバー」が医学分野においても市民権を得て一流学術雑誌と融合しつつあります。プレプリントサーバーは、これまで物理学や数学の分野では一般的に利用されていたらしいのですが、医学分野ではそのマイナス面のリスクが問題となり、コロナ禍以前はあまり受け入れられませんでした。そこでこの編集後記では、プレプリントサーバーのメリットとデメリットについて考えてみたいと思います。まずメリットですが、1つは研究成果の公表スピードの早さ、2つめはオープンアクセスによる影響範囲の広さ、3つめは読者からのフィードバックによる論文のアップグレード、4つめは知的財産の先取権取得にあると言われています。これらのメリットは、新型コロナウイルスのパンデミックに対して最大限に活用され、世界中の新型コロナ創薬と医療に貢献しました。しかしその裏ではデメリットが問題視されています。言うまでもなく最大のデメリットは、正式な査読を受けていないことによる研究結果の不確実性にあります。たとえば新規薬剤の安全性や有効性のデータに誤りがあった場合、患者に甚大な被害が及ぶ危険性があります。またSNSによって不確実な情報が世界中に拡散し、社会不安を増大させ、経済や外交にまで影響する恐れもあります。玉石混合状態の情報の山から真に有用な情報だけを抽出し、リスクを最小限に抑えるにはどうすれば良いのでしょうか？これまではSNSに

よる監視の目がその役割を果たしていましたが、現在では人工知能AIによる公表前論文のチェックシステムが加わり、論文の質を担保する堅実性が高められているようです。AIの能力を検証するために、おとり論文がプレプリントサーバーに投稿されましたが、AIは見事にフェイクデータを見破ったという記事があります。その他にもさまざまな情報技術によって、プレプリントの質を保つ努力が行われています。目前に迫っているポストコロナ時代には、論文はまずプレプリントサーバーにアップしてからジャーナルに投稿するのがスタンダードとなっているかもしれません。しかし、論文を引用する側としては注意深さが必要であることは言うまでもありません。

さて、振り返って本号についてですが、2編の総説と1編の原著論文を掲載することができました。貴重な研究成果を本誌で公表することを選択して下さった著者の先生、そして厳正なレビューをして下さった査読者の先生に感謝申し上げます。また、3編の最終講義には令和2年度に退職された小海康夫教授、令和3年度に退職される藤宮峯子教授、土橋和文教授（病院長）の偉大な足跡と若い人へのメッセージが記されています。9編の研究論文紹介では、本学研究者の研究内容と研究レベルの高さを知る上で大変勉強になる記事が掲載されています。本誌が学内外の共同研究へ発展するきっかけとなれば、編集者として望外の喜びとなるでしょう。

(編集委員 鳥越 俊彦)